

習学の寸心

石川 教 張

(現代宗教研究所所長)

探 求

かつて宮澤賢治はこう書いた。「大きな勇氣を出して、すべてのいきもののほんとうの幸福をさがさなければいけない。それはナムサダルマブフンダリカサストラといふものである」(「チュンセ、ポーセの手紙」)。

世界を包む大きな徳の力であり、万物にまことの幸福をもたらす根源である輝く光明、それが南無妙法蓮華經である、という。その本当の幸福を勇氣を出して探してゆく生き方もまた南無妙法蓮華經なのだ、というのが賢治のしるした魂であった。私たちは、何かを学び、幸福を探すために生れてきたにちがいない。悩みも迷いも苦難も南無妙法蓮華經を身につけ、仏の徳の力を知るための糧なのである。お題目という名の幸福探求のメッセージを受持する人生の道に限りはない。

アイデンティティ

日蓮宗は現代にいかなるメッセージを提供しえるのか。そもそも、日蓮宗は今の世にどんな役割を果たしているのか。二十世紀末から二十一世紀に向けて、どんな提言と実践を用意しているのか。「昭和」の終息に当って、日蓮宗そのもののアイデンティティを根本的に問い直さねばならない。

自 淨 力

日蓮宗の信仰は、仰ぐところは釈尊、信ずる法は法華經、という点にある。最大の危機は、その釈尊を忘れ法華經への不信、違背に沈み、釈尊・法華經の精神を事態としてさし示し、活現しえていないことにある。

小川泰堂が「学問・布教・堂塔の莊嚴を度世」と榮耀の手段とする道心なき僧の現状を批判し（「信仏報國論」）、田中智学が「寺院あるを知って宗門あるを知らず、法類あるを知って宗門あるを知らず、先師あるを知って祖師あるを知らず、布教あるを知って折伏立行あるを知らず」（「宗門之維新」）と指摘した事実は、過去のことではなく現在の事がらである。

「自淨其意」という一句がある。私自らの心を浄め、一人ひとりが清淨の道心を体してゆく（「自淨の信力」）を持ちあわせねばならない。

教 団

日蓮聖人の教団論の要諦は、「仏経と行者と檀那三事相應して一事を成ぜん」（問註得意抄）というところにある。寺院・住職単位の職業的僧侶集団から全僧侶・寺院婦人・檀信徒をもって構成員とし、医療・教育・文芸など各分野の有縁の人々をも結集しえる求道的・信仰的な信行弘通集団への脱皮をめざしてゆくこと、宗門内部の枠をのりこえて広く社会全体に日蓮聖人の信仰的志を普及・伝達してゆく社会への信仰実践と文化・平和活動へのとりくみによって、いかに日蓮聖人の日蓮宗への再生、「日蓮一門」の今日における再建が可能なのか。これがお題目を唱えひろめる運動の眼目であり試練であろう。

習 学

私はつくづく思う。自分とは何か。自分はいかに生きるべきか。仏法を本当に心底から信じているといえるのか。ひとりの僧として何をなすべきか、と。

その一切がわからない。ただ、わかることは、何もわからない、知らないという事実である。仏縁にふれたのも、こうした生き方とは何かを探すためであり、自分がこの世で何を学ばねばならないかを知るためにちがいない。

「習学」とは、私意による独断で学びお世話という功利性にたつものではなく、ひたすら仏法におのれを投げ入れて仏法の声に耳を傾けて、仏法を習い、自己を習い、人生のありようを学びとる、という研究態度をさすのであるまいか。

その「習学」には限りがない。一生が修行であり、修行こそ人生なのだ。志をたてることは、誓願に生きることである。そこに永遠のいのちがあり、魂がしるされていくのである。

— 願わくばこの功德をもって、あまねく一切に及ぼし、我らと衆生と皆俱に仏道を成ぜん。